

+江別市大学連携調査研究事業報告書

事業名「江別4大学のリソースを活用した周辺自治体の活性化のための基礎研究」

研究期間 令和2年7月6日～令和3年3月31日

調査研究者 江別4大学連携地域活性化調査チーム

構成： 増山尚美（北翔大学）、平澤享輔（札幌学院大学）、
押谷一（酪農学園大学）、藤本直樹（北海道情報大学）

I. はじめに

1. 研究の目的

江別市をはじめ周辺市町、関連経済団体等は学生地域定着広域連携協議会を設置し、若い世代の地域定着を促進するための事業などを実施している。協議会の目的の一つに、地域が優秀な人材を確保し地域活性化を促進することがある。

本研究は、市町村及び企業のニーズと大学のリソースを結びつけ、若い世代の地域定着を促進するための基礎的データを収集することを目的とする。

2. 方法

1) 企業側の状況を把握するために二つの機関にヒアリングを行った。

* () 内報告者

- ・北海道中小企業家同友会 令和2年2月12日（押谷一）
敬禮 匡氏 常任理事、全道共同求人委員長、岸川 沙織氏 事務局員
- ・江別商工会議所 令和2年2月25日（平澤享輔）
岸川裕治氏 専務理事、鴻野徹氏 事務局長

2) 学生の就職及び地域に対する意識をインターネットによって調査した。

対象者は学生地域定着促進事業（ジモガク）令和2年度登録学生

実施期間は令和3年2月9日～2月20日

414件発信、有効回収数61件、回収率15%であった。

アンケート調査はメールによる配信・回収とし、NPO法人えべつ共同ねっとわーくに委託した。

なお、本研究は、江別市大学連携調査研究事業として江別市から補助金を得て実施された。

3. 問題の所在

少子高齢化、過疎化の対策は地域社会の普遍的課題となっている。学生地域定着推進広域連携協議会に参加している江別市をはじめ周辺町村においても、若い世代の地域定着を促進することは、最優先課題の一つである。江別市には、特色ある教育・研究分野を有する4大学（短大を含む）があり、これまでも個々の研究室、教員、学生との連携が進められてきた。令和元年8月には「えべつ未来づくりプラットフォーム」が結ばれ、市町村自治体及び企業・関連経済団体と大学間での課題共有の場が形成された。昨年からはCOVID19により生活は一変し、経済活動にも影響が出ている。一方で、東京一極集中による脆弱性が明らかになり、リモート勤務による地方での就労の可能性も見えてきた。これを機に、プラットフォームによる産学官連携による新たな産業の創出も期待される。

江別市は札幌市に隣接し通勤圏にあることから、人口減少傾向は緩やかである。また市内に4大学1短大を有し、道内の他の市町村と比較し18歳から20歳代前半の人口比が高いが、大学卒業と同時にこの世代が減少する傾向が続いている。高齢化および人口減少傾向と地域の衰退は、

多くの自治体同様、江別市にとって課題である（図1）。

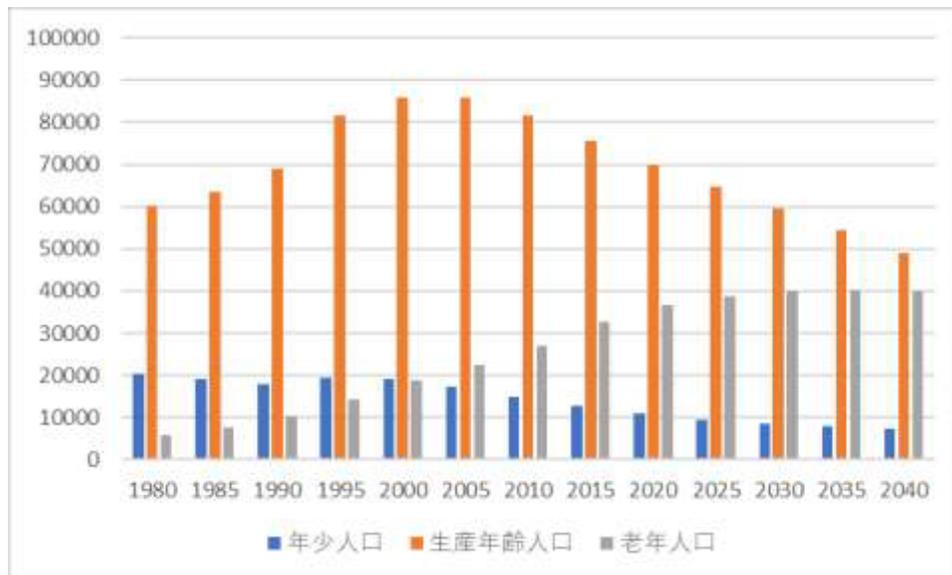


図1 北海道江別市の年少人口、生産年齢人口、老年人口の推移（2018年時点）

* 北海道江別市の人口推移 | 日本の人口推移 (population-transition.com)から転載

(人口統計データは、RESAS (地域経済分析システム) から得たデータを加工してグラフ化させており、2018年時点でのデータとなりますので、月日が経つことで数値に違いが生じることがありますのでご注意ください。出典：RESAS (地域経済分析システム) URL : <https://opendata.resas-portal.go.jp/>)

II. 企業側の状況～ヒアリング

1. 中小企業の求人活動について

(1) 北海道中小企業家の全道共同求人活動について

北海道中小企業家の全道共同求人委員長の株式会社レイジックス代表取締役 敬禮 匡氏、事務局の岸川氏に共同求人活動について、1月12日に増山研究代表と押谷がヒアリングを行った。

北海道中小企業家同友会は1969年に設立した。2019年度に50周年を迎え、現在会員は、6,052名となっている。

北海道中小企業家同友会の共同求人活動は1969年頃「若者が来てくれない」、「定着してくれない」、「育たない」という切実な悩みから生まれた。現在、共同求人活動には、およそ60社が参加している。

活動目的は、人を生かす経営をもとに、社員の生きがい・働きがいのある企業をめざすこと、それらの魅力をいかに伝え、迎え入れ、育てていくかを真摯に学び、経営者と会社を活性化し、変革させていくために優秀な若者を求人することとしている。

しかしながら、近年も、中小企業に対して若者が目を向けてくれないことから採用環境は極めて厳しい状況にある。

中小企業家同友会では、若者をどう北海道に残す（定着させるか）ために次のような考えにもとづいて共同求人を行っている。

- ・学校の教職員、とりわけ先生方との連携が重要
- ・地域の魅力を伝える

・仕事をするこの意味を伝える

企業の魅力を学生が評価してもらうことが、卒業後に地域の企業に就職し、定着してくれる、そのためには、学生と企業が直接、話をする場を積極的に設けるようにしている。とりわけ大学の教職員（教員、事務職員）との対話が重要である。

具体的な求人活動は次の通りである。

各大学に学内合同企業説明会を出向いて開催し、学生に企業情報に関するPRを行う。

2019年には、酪農学園大学、札幌学院大学などの道内の学校だけではなく、岩手大学、弘前大学、高崎経済大学、中央大学、神奈川大学など道外の学校でも実施している。2020年は、新型コロナウイルス（COVID-19）の感染が拡大していたことから、ほとんどWEBでの開催であったが、道内はもちろん道外の学校からも参加があった。

求人サイト「Jobway」による合同説明会・インターン合同説明会

*Jobwayは中小企業家同友会が提供する就職情報サイト

「Jobway」に企業情報を掲載

大学などの学校との信頼関係を築くために、学校教職員との懇談会を実施し、学校の動向や情報が得ている。そのことによって企業と学校の信頼関係づくりがスムーズな採用活動に繋がるとしている。学校との懇談会は、2019年は、2月から12月に、北海道科学大学、室蘭工業大学、札幌市立大学、東海大学札幌キャンパス、星槎道都大学で10回実施し、企業側から10～25人が参加、学校側から10～34人が参加している。2020年は5回、開催している。

学校での講演活動も、北翔大学、札幌学院大学などで、延べ36回（複数回実施している学校もある）実施し、2020年度も延べ51回実施している。なかには学期の講義（15回）を全てそれに充てている学校もある。

学校に対するキャリア教育支援を行っている。これはキャリアガイダンス等を学校の講義において経営者自身や若手社員が講話することで、学生に直接企業の魅力を伝えることができる。また、「共同求人学習会」、「経営指針学習会」などにおいて、経営者から「危機を乗り越えた人を生かす経営実践」などの実践的テーマによる学習会を実施している。

このほかにも「採用勉強会」、「社長弟子入りプロジェクト」など、学生向けだけではなく、経営者、社員に対する活動を重層的に実施している。

（2）中小企業への就職に対する意識

北海道中小企業家同友会のこれまでの求人活動のなかで、学生から「道外の大学に在籍している北海道出身だが、求人に関する情報がない」などの意見があった。

さらに、学生の多くは、札幌圏で就職したい、とくに札幌に支社などのある大企業への就職希望者が多い。

そのため、共同求人委員会では、「地域とともに若者を育てる」ことが重要と考えている。例えば、学校において、1年次のときに経営者の講話を聴く、2年次には、企業などのインターンシップを経験し、ビジネス・コンテストなどに積極的に参加し、企業あるいは仕事に対する取り組みの魅力を体験することが重要である。

就職を控えた学生に対するメッセージは、「育てるのは企業、飛び込んでおいで（敬禮 匡氏）」とし、幸せになるという思いを持った素直な学生を採用していきたいとのことであった。さらに求職という壁を乗り越えれば、即、幹部候補生として活躍でき、大企業のような同僚と

の不毛な競争もないのが中小企業の魅力である、そして、お客様とふれあいが密であり、お客様からの「ありがとう」を直接、受け取ることのできる「(タマゴチ(魂のご馳走様))」が魅力であるとしている。

(3) 社会変容に伴う求職・求人のあるあり方

今回、共同求人委員長の株式会社レイジックス代表取締役 敬禮 匡氏、事務局の岸川氏に共同求人活動についてヒアリングしたが、同友会の共同求人活動に参加している企業は、およそ1%である。これが、中小企業が求人していないのか、求人していても個別の対応で十分としているのか、ということか不明ではあるが、委員会としては、大学などの学校との連携によってさまざまな取り組みをなされている。

高度経済成長時あるいはその以前には、指導教員や就職部門からの紹介で就職が決まった状況とは異なり、学生が自ら求職の活動を行い、企業も優秀な人材を自らの努力によって確保しなければならず、双方にとって厳しい状況にあると考えられる。

とくに、大学の教員側は、教育、研究に追われ学生の就職活動に対して積極的に取り組むことは難しい側面もある。しかしながら、大学は、地域の社会や経済活動に対する貢献が重要であることを十分に認識して、優秀な人材を企業、とりわけ地域に根を下ろした中小企業に送り込んでいかねばならない。

そのためには、学生、企業、学校のそれぞれが「地域の社会や経済」のために働くことに対する意識をさらに高めていかねばならない。

近江商人の「三方よし」の思想に基づけば、労働を企業に提供する人びと（主に学生）と、それを受け入れ、自社の発展を目指す企業の二者だけの便益だけではなく、地域社会・経済も含めて三者が便益を受けるための協働の仕組みを構築していかねばならない。

北海道中小企業家同友会が大切にしているのは「共育」である。そして、経済を支えているのは一部の大企業ではなく、中小企業であることを改めて認識し、優秀な学生を送り込むための取り組みを進めることが重要である。

とりわけ、COVID-19による影響も含めて、働き方、働くことの意味などは、数年前に比べて大きく変容している。すべての主体の意識改革、行動変革が求められていることを改めて認識したい。

2. 江別市への学生の就職と定住

ここでは、まず江別商工会議所に対して行ったヒアリング調査から江別市内の企業の学生の求人に対する状況を見る。つづいてジモガクに参加している学生に対して行ったアンケート調査から学生の江別市内企業の就職、定住に対する考え方を考察してみる。

(1) ヒアリング調査からみえてきたもの

まず2021年の2月25日に商工会議所においてヒアリングを実施した。その結果から、江別の企業の江別市内の大学生の求人に対する状況をみている。

ヒアリングの項目は、

- 1) 2020年度の採用方法や学生の反応にコロナの影響があるか
- 2) どのような方法で学生採用募集しているか。

+学生をひきつけるための試み、企業を知ってもらうためにどのようなことを行っているか、またその効果はあるか（福祉施設内イベントへの招待、インターンシップ受け入れ、共同求人、大学での説明会開催など）

- 3) 今の学生に求めるところや採用基準

専門性、教養、協調性、応用力、コミュニケーション能力、
あるとよいスキル

4) 学生の地元定着について、大学に求めることはあるか

1)、2)について江別商工会議所にヒアリング調査を行ったところ、江別市の多くの企業は、小規模な企業が多く、大学生の採用はそれほど多くないとのことであった。そのため、コロナの影響による影響は、ないわけではないがそれほど多くないのではないと感じられた。

そのため、学生を引きつける積極的な試みが行われてはいないようであった。

ただ江別市でも昨年度まで有給インターシップを行って数名の学生が参加している。また札幌学院大学でも一時、江別市の企業を招いた説明会を行っている。

また話の中で、江別市にある大手企業で内定を出した7名のうち、6名が辞退していることがわかった。現在の就職状況が良いことからくる現象だと思われるが、学生が江別市の企業よりも公務員や他の企業への就職を考えていることが考えられる。

3)については、コミュニケーション能力をあげていた。企業の中で世代間ギャップがあり、若い世代とのコミュニケーションの難しさが大きな問題となっているようであった。また言われたことしかやらないという応用力、協調性のなさもあるようである。すぐにやめてしまうという問題もあるようであった。そのため、新卒ではなく、中途採用で採用する企業も少なからずあるようである。

4)については、もともと江別市の企業に雇用の受け皿が少ないので、とくに求めることはないようであった。

さらに話の中で、政策として移住による江別市への定住よりも、札幌市などから休日などに江別市を訪ねてもらえるなどの交流人口を増やすことに重点を置くことを考えているようであった。その理由として移住者を多くすることが難しいことがあるようであった。

以上のことから江別市において学生の就職を促進するためには、地元経済のさらなる成長が必要であると考えられる。地元企業が成長し、江別市の大学を卒業した学生が就職できる環境を作り出すことが必要である。

今回のヒアリングでは、江別市において優良企業と考えられている企業においても、内定者を確保できなかったことから、より江別市の企業を知ってもらう努力も必要である。

(2) 江別への就職、定住について アンケート調査から

次にジモガクに参加している学生に対して行ったアンケートから江別市での就職、定住についての考え方をしてみる。アンケートにおいて就職したい地域を複数回答可で挙げてもらった。その結果、61人いる学生のうち、ほぼ4分の1に当たる学生が江別市を少なくとも選択肢の一つとして考えていることがわかった。

項目	札幌市	江別市	回答者数
件数	26	15	61
割合	42.6%	24.6%	100.0%

なお学生地域定着推進広域連携協議会に加盟している学生へのアンケート調査では、卒業後に江別市に住みたいか、訪ねたところ「はい」と解答した数は62人中10人(16.4%)であり、それほど多くはない。ただどちらともいえないが33人と半数以上を占めている。これは3年生以下の学生が将来的なことがわからないことがあるからと考えられる。

項目	はい	いいえ	どちらとも いえない	合計
件数	10	18	33	61
割合	16.4%	29.5%	54.1%	100.0%

これを居住地別に見ると、江別市に住んでいる学生が、江別に住みたいと回答した比率が高い。また札幌市に住んでいる学生は江別市に住みたいと回答したのは一人だけである。このことから江別市に自宅を持つ学生(3名)やアパートに住んでいる学生(4名)は自宅があることや江別市の良さを知っていて江別市に住みたいと思っていると考えられる。

江別市のアパートに住んでいる学生は、「札幌に近く都会すぎない」、「札幌に近いが、生活範囲は都会すぎず交通手段や色々なお店が充実しているから。」、「比較的家賃が安く、自然も豊かである。大都会札幌の隣であり、商業施設なども充実しており、生活していて何不自由がない。」、「住みやすく札幌も近いから」という感想を述べており、札幌市に近いというメリットと郊外であることから自然環境がよいというメリットをあげている。

自宅にいる学生は、「生まれ育った場所なのでもう一度ここに住みたいと思います。」、「江別で生まれ育ったから、江別の人や雰囲気が大好きだから。」という郷土愛からくる理由と「一人暮らしができるくらい自分のお金が貯まるまでは卒業後も江別に住みたいと思います。」と自宅があることによる経済的な側面のメリットをあげている。

江別市以外に住んでいる学生からは、一人だけ江別市に住んでもよいという学生がいた。その理由は、「交通の便もある程度よく、魅力あるものが多い印象があるからです。」という回答があり、やはり交通の便がよい点が上げられている。それに加えて、魅力がある点が上げられている。

江別市に住まないという学生は、「持ち家に住んでいるから」という回答が数名あった。また「就職先として江別市の企業等も視野に入れているが、実家が札幌であり、江別に近い端の方であるため、実家からの通勤も可能である。そのため、江別市の企業等に就職することはあっても、居住までは至らないと考える。」という回答もあった。このほか、「色々な場所に住んでみたいから」、「暖かいところで住みたい」、「就職先が江別市ではないため」、「4年間江別市に住んだが、良くも悪くもなかったため。」などの回答があった。

以上のことから、江別市について札幌市との交通の便、自然の多さ、商業施設の充実など魅力を感じている学生も多いことがわかる。これらのメリットを生かし、さらに大きくしていけば江別市に定住する人も増える可能性がある。

大学卒業後に江別市に住みたいですか？（3択）（必須）					
問4	項目	はい	いいえ	どちらとも いえない	合計
江別市	件数	7	7	20	34
	割合	11.5%	11.5%	32.8%	55.7%
札幌市	件数	1	7	7	15
	割合	1.6%	11.5%	11.5%	24.6%
それ以外の 道内	件数	2	4	5	11
	割合	3.3%	6.6%	8.2%	18.0%
道外	件数	0	0	1	1
	割合	0.0%	0.0%	1.6%	1.6%
合計	件数	10	18	33	61
	割合	16.4%	29.5%	54.1%	100.0%

Ⅲ. 学生調査

江別市内4大学（短大を含む）のジモガク登録学生414人に送信し、有効回答数は61件、回収率15%であった。これまでジモガクで実施したアンケートの回収率は4～5%であり、それよりは多い回答が得られた。

（1）回答者の属性

①「学年」

3年、2年、4年、1年、大学院の順に多かった（図1）。在学中にジモガクのボランティア活動を体験し、大学院でも継続する例が見られた。2020年度はジモガクの活動が行えなかったことから、1年生は登録のみとなった。

②「性別」

男26.2%、女70.5%、回答しない3.3%で、女性の割合が高かった。

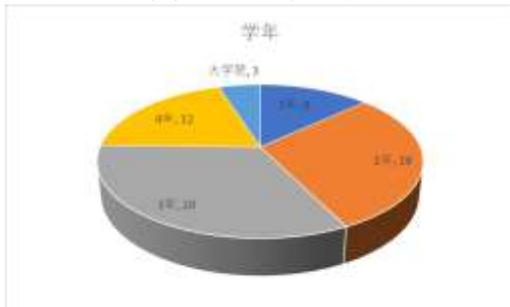


図1 学年

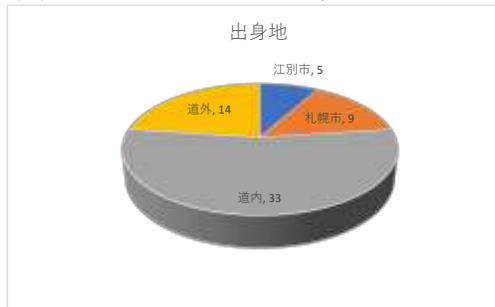


図2 出身地

③「出身地」

江別市8.2%、札幌市14.8%、それ以外の道内54.1%、道外14%であった（図2）。江別市と札幌市以外の道内出身地と、道外出身地を表1、表2に示した。

「現在の居住地（帰省中の場合は通学機関の所在地）」は、江別市55.7%。札幌市24.6%、それ以外の道外18%、道外1%で、半数以上が江別市に住んでいる。

④「通学形態」

自宅から通学が54.1%、アパートや寮44.3%、その他1%であった。

表1 出身地 札幌市・江別市以外の道内と道外

それ以外の道内		道外	
市町村	件数	都道府県、市町村	件数
北見市	2	東京都町田市	1
訓子府	1	韓国	1
新十津川町	1	青森県	1
白老町	1	青森県三沢市	1
滝川市	1	大阪府豊中市	1
えりも町	1	群馬県	1
芦別市	1	福島県	1
栗山町	1	島根県出雲市	1
函館市	1	大阪府高槻市	1
留萌市	1	埼玉県上尾市	1
幕別町	1	岩手県紫波町	1
釧路	1	合計	11
網走市	1		
北斗市	1		
平取町	1		
斜里町	1		
岩見沢	1		
広尾町	1		
十勝鹿追町	1		
旭川市	1		
美唄市	1		
合計	22		

⑤「卒業後に江別市に住みたいですか？」

はい16.4%いいえ29.5%、どちらともいえない54.1%で、どちらともいえないの割合が高かった（図3）。現在の居住地ごとの回答は表の通りであった。



図3 卒業後に江別市に住みたいか

(2) 就職関連

①「就職先の希望地はありますか？（複数回答）」

結果は、表2の通りで、江別市は24.6%で、42.6%の札幌市に次いで多かった。道外と回答した者は、沖縄市以外出身地を上げていた。

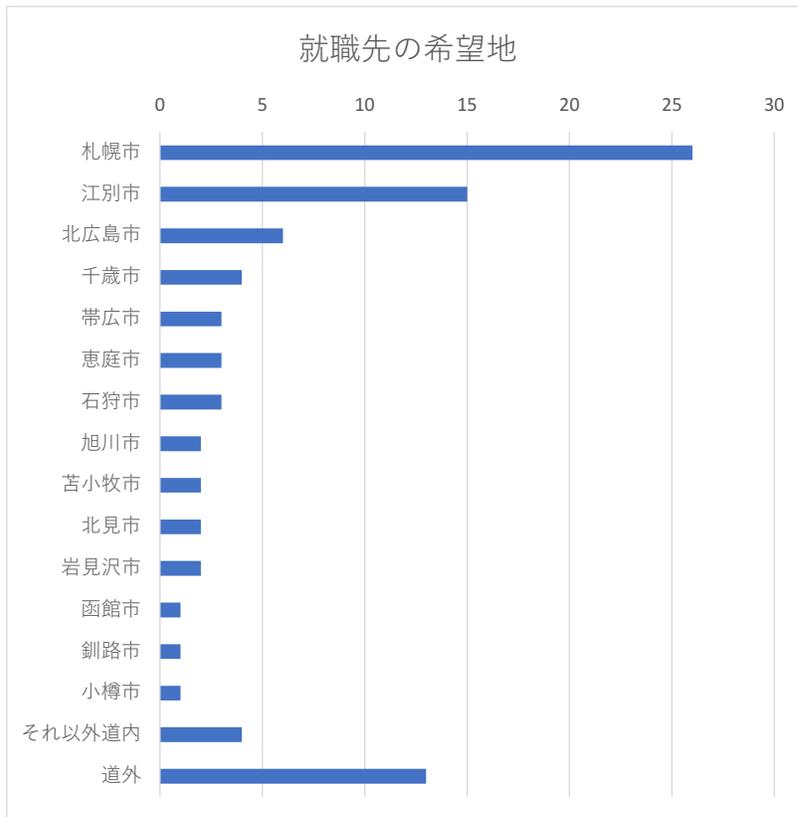


図4 就職先の希望地

表2 札幌市・江別市以外の就職先の希望地

それ以外の道内市町村		道外	
市町村	件数	都道府県	件数
滝川市	1	東京都	2
網走市	1	東京都や神奈川県など	1
道東	1	青森県	2
新篠津村	1	未定	1
合計	4	福島県	1
		島根県	1
		沖縄	1
		合計	9

②「求人情報をどのような方法で入手していますか？（複数回答）」

結果は、合同説明会（対面、リクナビやマイナビ等の主催）が47.5%一番多く、求人サイト

からの情報37.7%、学内企業説明会36.1%、企業のホームページ18%。教員からの紹介8%。家族や知り合いからの紹介11.7%が続いた。その他と回答した9.8%には、教員採用試験を受験する、実習があがっており、大学が有する教員養成や福祉関係の学部学科構成が反映されていた。

「就職先を選択する基準はどれですか？優先する順に3つ選んでください」の結果、1番目に挙げられたのは、勤務地21.3%、福利厚生19.7%、給料16.4%、環境への配慮や社会貢献度13.1%、専門を生かせるか9.8%、転勤の有無と趣味の時間を確保できるかが4.9%、その他8.2%であった。第2希望は給料が39.3%で一番多く、3番目までの合計でも給料が1番、次いで福利厚生、勤務地があげられた。その他の（9件）の記述回答では、いきがい、やりがいになるか、自分のやりたい職業かどうか、自分の技術や知識が活かせるか、社風が自分とあっているか等、生きがい、やりがいに関するものと、人間関係、仕事場の雰囲気があげられた。

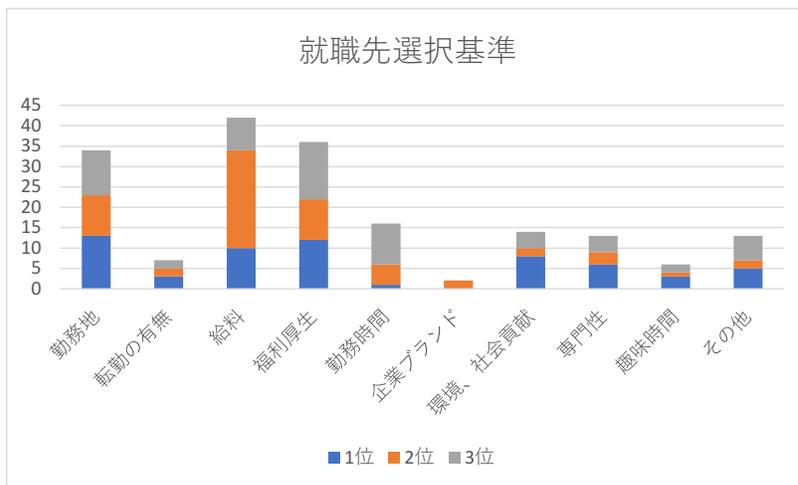


図5 就職先を選択する基準（第3希望まで）

③「希望の産業種を1つ選択してください」

結果は教育・学習36.1%、医療・福祉と農業・林業が13.1%、公務（他に分類されるものを除く）11.5%、金融業・保険業とサービス業（他に分類されるものを除く）が4.9%、卸売業・小売業と宿泊小・飲食サービス業が3.3%、情報通信業、生活関連サービス業・娯楽業、運輸業・郵便事業が各1件1.6%であった。

「希望の職種を1つまたは2つ選択してください」の結果は、教育・保育31.1%、公務員29.5%、事務・オフィスワーク21.3%、介護・福祉18%、農林水産14.8%、企業・マーケティング・経営・管理職9.8%等があげられた。

職種に必要な資格取得を目的とする学科を選択して入学してきた学生は、学年にかかわらず職種が明確であるため上位の職種になったと考えられる。教育や福祉、農林水産、公務員などの分野は4大学の特徴でもあり、学生の意向にも反映されている。

(3) 地域の魅力と活性化

①「あなたは江別市内に魅力を感じる場所や物、事がありますか？」任意回答

回答率77%で、はい59.6%、いいえ40.4%であった。

記述は25件回答があり、内容は次の通りである（原文のまま記載）。

〈場所〉

野幌森林公園／防災ステーション／大きい蔦屋書店です／ブタキングというラーメン屋があること

〈地理的条件、雰囲気〉

札幌に近いこと／札幌に近い／札幌市に電車一本で行けること／人との繋がりが深いところ／静かで札幌への交通が便利で住みやすいと思っています／札幌が近く、服や雑貨などの買い物を選択肢が多いが、江別市内は都会すぎずうるさくないため生活しやすいこと／江別はこれといった有名な場所とかはあまりないけど、札幌よりも緑が多く空気が綺麗な感じがします！それが魅力です！

大学が多く、他大学との交流の場を設けやすい事／図書館や公園が多くあり、学ぶ環境が整っていること。／学生の町でもあり、若者の活気が溢れている。ベッドタウンとして、のんびり過ごすことも可能である／商業施設が揃っている／自然が豊かで、街も栄えてるため。／自然がある／ゆったりできる／自然の豊かさ、レンガ作り、スポーツが盛ん

〈物〉

スイーツが美味しい／パン屋が多い／パンがおいしい。レンガが有名／食べ物(主に小麦)が美味しい、活発的なイベント、有意義な大学生活を過ごせる等

〈事〉

活発的なイベント、有意義な大学生活を過ごせる等／学生の主催する面白い取り組みに参加することができるからです

〈その他〉

じもがくも含め、大学生などへの歩み寄りのような姿勢がとても魅力的あると感じた。まだ江別市のボランティアに参加したことがないため、詳しくお話することは出来ないが、そのような活動を行ってくださることは大学生側としてはとても有難いため、魅力であると感じる。

クロス集計「居住地×あなたは江別市内に魅力を感じる場所や物、事がありますか？」の結果(表3)は、はい、いいえともに江別市在住者の回答が多く、関心も高いと考えられる。江別市と札幌市在住者は、札幌市と比較し地理的条件と雰囲気について記述したものが多く、自然が豊かで札幌との交通の便が良い、学生の街であることを魅力としてあげていた。

表3 クロス集計「居住地×あなたは江別市内に魅力を感じる場所や物、事がありますか？」

1 2. あなたは江別市内に魅力を感じる場所や物、事がありますか？				
問4	項目	はい	いいえ	合計
江別市	件数	17	12	29
	割合	36.2%	25.5%	61.7%
札幌市	件数	6	5	11
	割合	12.8%	10.6%	23.4%
それ以外の道内	件数	5	1	6
	割合	10.6%	2.1%	12.8%
道外	件数	0	1	1
	割合	0.0%	1.6%	1.6%
合計	件数	28	19	47
	割合	59.6%	40.4%	100.0%

②「若者の地域定着に関し、アイデア等がありましたらご記入ください」(自由記述)

12件の回答があった。具体的な提言があり、地域活性化に関心のある学生が一定数存在する

ことがわかった。若者の意見が反映されるよう、連携事業に参画する機会を設けることで、大学時代を過ごした地域を卒業後も選択する可能性が広がるだろう。公共交通機関等インフラの充実や、家賃の安さ、サービスや補助といった経済的な支援への要望は、自治体や地域の協力が得られ具体的に支援策が示されると学生へのアピールにつながると考えられる。余暇を楽しめる施設やイベント、若者が利用する店舗の有無も、定着率の向上に関与する可能性が高い。ボランティア体験により地域への愛着や課題に対する意識が高まったとする意見もあった。調査対象がジモガク登録者であるため、ジモガクに意義を感じ、さらに活動が浸透することを願っていることも示唆された。

○自由記述内容、原文のまま記載。

(江別市・大学4年・男) 住みやすい街にすること。そのために学生向けや社会人向けにクーポン券などを配ると良い

(江別市・大学3年・女) お店を発展させたり、新しい活動やイベントをしてほしいと思います。なかなか、難しいことだとは思いますが、若者の地域定着を目指すには若者に寄り添ったアイデアが必要だと思います。

(江別市・大学3年・女) 私は江別で生まれ育ちましたが、江別は魅力がたくさんあると思います。江別にも魅力的な企業があることをもっと発信していくことが大切だと思います。私は江別で生まれ育ちましたが、他の地域を知らないのでも他の地域でも住んでみたいという気持ちもあります。もっと若者が積極的に活動できるような、戻ってきたいと思えるようなものがあったら良いかなと思います。”

(江別市・大学3年・女) 私の知り合いでもそうですが、江別は子育て支援に力を入れているところはいいと思うが、野幌駅周辺しか開拓されていないことや、子育て支援よりも上の世代への取り組みが目に見えてないよね、と言っていました。なので、このことが江別市の地域定着につながらない原因なのではないかと思っています。

(札幌市・大学2年・性別回答しない) その地域を知るため、その地域に行こうとしても、お金や時間がかかってしまうと感ずきます。本ボランティアでは、交通費等支給されることが多く、金銭面は良いのですが、やはり私のように札幌に住んでいたりすると遠くなってなかなか行きにくいと感ずけてしまいます。

そのため、まずは4大学等でもワークショップのような事を行い、そこで特産物等を配るなどして地域を知ってもらい、ボランティアに来てもらうなどはどうでしょうか。

実際私も、最初は「ボランティアに行っても大丈夫なのかな」「ちょっと大変だな」と、不安なども抱えていました。しかし、一度行ったりその地域の方々に接していただくことでその地域の方々や地域の良さに気づき、また行きたくなると感ずいたので。

そのため、私たちが行くということももちろんなのですが、まずは地域の方々に来ていただき、そこから地域を知ってもらい、定着していく……と言った形はどうでしょうか。的はずれな回答だったら申し訳ありません。

(札幌市・大学4年・女) 小さい頃からその地域での楽しい体験があると、その地域に残りたいという思いが高まると思うので、小さい子が楽しめるイベントを多く開催すること。

(札幌市・大学3年・男) ・地域で働くことの魅力、首都圏に比べたときの住みやすさを伝える。・地域の商業や交通を発展させて、若者が住みやすくなる。・住居を新しいものを建てたり、古い住居の内装を改装してきれいにし、住みたいと思えるような場所を作る。

(札幌市・大学1年・女) 若者が勉強できるスペースを増やす。

(栗山町・大学2年・女) アイディアというほどのことではありませんが、私の考えを書かせていただきます。

大学生が、江別市で既に働いている方、江別市に住んでいる方のお話を聞ける機会を作ることです。(直接会うのが厳しい場合はzoom等のオンライン)で行ってもいいと思います。江別市で働く利点・江別市に住む利点を知る事で、自分も江別市に住んで仕事をしたいと思う大学生が出てくると考えます。また、大学生の時に江別市でのボランティアに参加できる機会を作り地元の方達と関わりを持てる機会を作る事で、江別市に貢献したい!と思う学生が出てくるとも考えます。そのような活動を行い、実際に江別市で仕事をしたり住んだりした方がいたら、それを江別市のホームページ等で紹介しても良いと考えます。

(函館市・女・大学院1年) バスの路線を増やすなどインフラをもっと整備して欲しい。

(留萌市・女・大学院1年) 魅力的な就職先と、余暇を楽しめる施設などがあること

子育て環境が充実していること。大型のショッピングセンターがあること

(幕別町・大学2年・男) 地域定着のためには、魅力を高めること、不便さを取り除くこと、そして地域のブランドを高めることが大事だと思う。特に若者は、お金の余裕がないため、公共交通機関の充実や家賃の安さ、サービスや補助といった金銭的な支援も必要になると思う。また、イベントを増やす、例えば音楽ライブやフェスを開催したり、ゲストを招いたりするなど、若者向けの催しを増やすことも、町の魅力を上げていくには大事だと思う。

(北見市・大学2年・女) コロナの関係で難しいことも多いかもしれないが、もっとジモガクさんの活動をアピールすることが大切だと思う。正直なところ、友人内では知名度が高くなく、私がジモガクさんに参加した話をするととても興味を持ってくれる。実際に以前野幌駅前のイルミネーション装飾に参加したことで野幌駅に対する親近感が沸いたため、知名度が上がり、活動に参加する学生が増加することで江別に対する気持ちが変わる学生も増えるのではないかと思う。

(斜里町・大学2年・女) イベント事を若者同士で企画し運営するまでやる(何度も話し合いを重ねる)

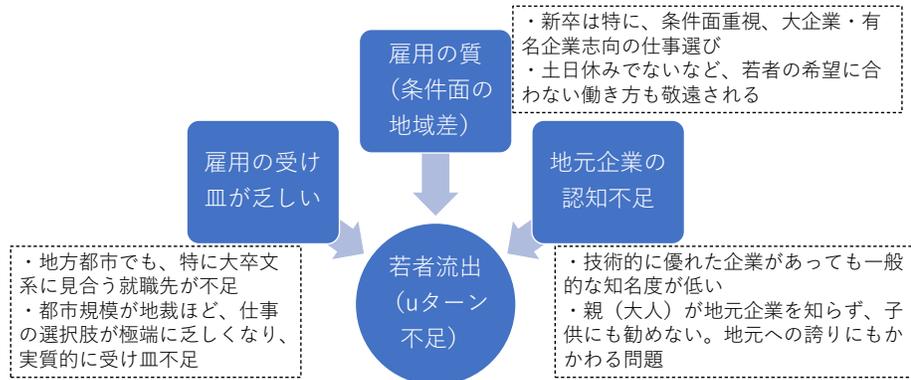
(青森県・大学1年・女) まだ江別市に半年もいないので、もっと知りたいと思います。

(韓国・大学1年・女) 広くてかわいいカフェ

IV. 若者の地域定着

若者の地域定着には、地域に就業機会があることが重要とされる。高見は地方における若者の「働く場」の問題として①雇用の受け皿が乏しい、②雇用の質、③地元企業の認知不足をあげている(図6)。そして、若者の地域定着・還流のための「働く場」の問題として、地方圏を「地方都市(主に中小都市)」、「都市部から離れた地域」、「都市近郊の郊外市町村」の3つに分類し、状況と課題を指摘している(表4)。札幌市の通勤圏に位置する江別市は「都市近郊の郊外市町村」に該当し、人口減少の問題と地域における就業機会創出との関連にひっ迫感は薄い。しかし、労働人口の減少と高齢化率の上昇は避けられない。ある程度の人口を維持できている段階で、若者にとっても魅力のある街づくりの設計が必要である。

図6 若者定着・還流に当たっての「仕事の壁」



高見具広 (労働政策研究・研修機構 (JILPT) 研究員「若者定着・還流に向けた雇用の在り方」、途方大学の進行及び若者雇用等の関する有識者会議：ヒアリング資料、2017年8月7日 から転載

表4 地方圏の若者定着に対する課題

	地方都市 (中小都市)	都市部から離れた地域	都市近郊の郊外地域
特徴	多様な業種・職種があるが、東京などと比べ、オフィス勤務の仕事に限られ、医療福祉・介護や飲食店などのウエイトが高い。製造業の集積地域では、高卒就職は好調であるが、大卒 (文系) の雇用受け皿にはなっていない。特定の分野で競争力のある優良中小企業がある。県外進学者のUターンが進まない。	人口減少対策や地域活性化の点で、Uターンにかける期待が大きい。大規模な企業誘致は望みにくい。	近隣に通勤可能な都市部がある。一定の雇用機会が存在することで、市内での雇用機会創出に固執しなくてよい。人口面では近隣から子育て世代などの流入が見られる。
課題	賃金水準で大都市と格差がある。就業時間が夜間や土日にかかるなど、若者の集合希望と折り合わない仕事が多い。地元企業が十分知られていない。	雇用機会の創出が求めにくく、若者が将来まで見据えた生活設計を立てられる仕事が乏しい。	地元出身者のuターンは少ない。
対策	若者の就業希望に合うよう求人条件を工夫し、マッチングを図る。地元企業を知ってもらう取り組み。	農産物や観光等、地域資源を生かした雇用創出に取り組む。	子育て支援など生活環境を充実させて近隣から人口を呼び込むとともに、地域資源を生かした「街づくり」を行うことで遠方からの移住者をひきつける

* 高見具広 (労働政策研究・研修機構 (JILPT) 研究員：若者の地域定着・還流のための「働く場」の問題、Business Labor Trend, 2016. 5から、筆者が表にまとめた

4 大学 1 短期大学を有することは江別市の地域資源の一つである。学生の市内就職率は高いとは言えないが、毎年一定の求人と採用がある。北翔大学における平成27年度から令和2年度までの江別市内求人件数（江別に本社機能がある）は年により35件から38件で、江別市に就職した人数は7名から10名であった。主な就職先は社会福祉法人5件、学校法人7件（うち3件は大学、4件は幼保）というように学科の専門分野に関わるものがほとんどで、一般企業は少ない状況であった。

江別商工会議所のヒアリングでは、江別市内には中小企業が多く、求人はハローワークを通しての欠員補充等が主で、大卒新人の採用は積極的に考えられていない状況がわかった。10名以下の小規模な企業では、採用に予算をかけられない、インターンシップ受け入れや新人育成担当者を配置できない、年齢差による世代間ギャップがあるなどの課題がある。知名度の高い企業やユニークな分野で注目される企業も学生の認知度は高くない。地域の活性化に関して、大学および学生には、地元への就労よりも学生が地域のことを知り、足を運び交流の機会を増やすことが期待されている。地域に愛着を持つことで、将来Uターンや定住の可能性も出る。

北海道中小企業家同友会では、共同求人活動など様々な働きかけを行っていた。COVID-19の影響で、2021年度は合同企業説明会をオンラインで実施した。道外を含むこれまでより広範囲の地域の学生にコンタクトできた一方で、他の都道府県の企業とも競合することになると述べていた。道内の大学を中心に、大学での講演活動にも力を入れ、キャリア教育として学生に道内の中小企業の情報を提供する機会をつくっている。また、大学の教職員との懇談会を行い、特に理系の分野で学科や研究室単位でのつながりを保っている。また、中小企業のメリットとして、個人が歯車の一つとして没個性化せず事業全体にかかわることができる、成果が目に見えやりがいを感じると述べていた。大学に対しては、道内の優良な中小企業や経営者の思いを学生に伝えるため情報伝達の機会を設けることを期待している。

学生は大企業や安定した職種を志向する傾向があり、大学の就職課やキャリア支援センター等の部署でも、情報の少ない中小企業を推薦することには消極的である。しかし、学生への調査から、将来的に生活を維持できる展望が見えれば、地域の企業とともに成長することにやりがいを覚える学生がいると思われる。また、障害者の権利条約等の観点で、大学では障害を含む多様な背景を持つ学生を受け入れている。それらの学生にとって就職は大きなハードルになる。地元企業と大学が接続することで、在学中からトレーニングの場を設け、大学の専門分野と地域の社会保障の部署が長期的に見守り支援することで、中小企業においても多様な人材の受け入れが可能になることが望まれる。

地域の小中学生が地域の企業を知る活動を大学生がサポートしたり、地元企業を紹介するフェスの運営や体験イベントを共同開催したりすることを通して、子供のころから地域に愛着や関心を持ち、地域アイデンティティを醸成することも期待できる。

さらに、大学と企業で連携し商品やシステムを開発する、学生や若者の起業をバックアップするなど、既存の産業をブラッシュアップしていくことも必要である。